
これが私の旅

まりも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

これが私の旅

【Nコード】

N3452C

【作者名】

まりも

【あらすじ】

普通の女子高校生だった主人公。しかし突然親友が消えるという事件が起きる。

始まり

私は嘉穂という友達と会う約束していた。私はその待ち合わせ場所に行く為に青信号を渡っていた。その時突然トラックがもうスピードで向かってきた。

「恵理ー！」

私は母のかんだかい声で目覚め。あれは夢だったのか。何て恐ろしい夢なんだ。私は思わず顔がひきつった。

「何ー？」

私は少し大きい声で言った。私は、鈴木 恵理。バレーボール部で都大会を目指したり、友達とプリクラを撮ったり時にはスカートの長さで先生に怒られたりと普通の女子高校生活2年目をおくらしている。

「恵理ー！」

聞こえてないのだろうか。めんどくさいと思いながらも私は重たい体を持ち上げ、ノロノロと部屋を出て、

「何ー？」と言った。

「嘉穂ちゃんのお母さんから電話ー。」

嘉穂は私の親友だ。名字は川崎。同じバレーボール部に所属し、辛い時も助けあってきた。嘉穂は成績は優秀で運動もでき、皆の憧れの存在だ。

「嘉穂のお母さん？」

私は思わず目を丸くした。

「うん。嘉穂ちゃんと何かあったの？」

嘉穂のお母さんとは軽く挨拶をしたことしかない。

「何も。電話貸して。」

私は淡々とした口調で言った。そして私は部屋に入り、電話に出た。
「もしもしー...」

私は緊張した。ケータイで友達とだけしか長年話さなかったせいだ

ろうか。

「あつ恵理ちゃん？」

嘉穂のお母さんの声…。嘉穂みたいに少し高めの声だ。気のせいだろうか、少し声が震えている。

「はい。」

「嘉穂のお母さんだけど、嘉穂そっちに行っていないかしら。」

「来てませんけど帰っていないんですか？」

「そうなの。まだ帰っていないのよ。こんな遅くなること何て今までなかったのに。」

嘉穂は滅多に第一ボタンを滅多に外さないくらい真面目なタイプだ。嘉穂がこんなに帰らないことはあり得ない。もう12時を回っている。

「それじゃあこんな遅くにごめんなさいね。」

「いえ、何かあったら連絡しますね。おばさんも嘉穂から連絡があったらお願いします。」

「わかったわ。ありがとお。それじゃ、おやすみなさい。」

「おやすみなさい」

私はゆっくりと電話を切った。あり得ない！嘉穂は真面目な子だ！なにあっただ！嘉穂に！私は急いで嘉穂の携帯に電話した。しかし、電話から聞こえてきたのは、

「おかけになった電話番号は現在―…」

という、女の人の声だった。嘉穂…どこにいったの！？私は、急いで出掛ける支度をし、

「ちよつと出掛けてくるー！！」

と叫んだ。

「ちよつと恵理ー？」

と言う母の声を無視して私は家を飛び出した。何処に行こう…。私は足を止めた。探しに出てきたものの、何処を探したら良いのかわからない。

私は当てになりそうな所を片っ端から行くことにした。一緒によく

行った、飲食店、書店、洋服屋。何処にもいなかった。というよりもこんな時間までやっている店はほとんどなかった。後、当てになりそうな所はない。後は学校か。いや、流石にそれはないか。夜の学校にいてなんの特になるのだろうか。私はもう一度、嘉穂に電話を試みることにした。だが

「おかけになった電話番号はー…」

という声が聞こえてくるだけだった。私はもうこれ以上探しても仕方ないと思い、家に帰った。

「恵理ー。今何時だとおもってるの？」

時計を見ると2時30分を過ぎていた。

「2時30分。」

私はそういつて部屋に戻ろうとした。

「ちよつと待ちなさい！」

「うるさい…」

私はそう小さな低い声を出し思いきり母を睨んだ。

「恵理…」

私はまた部屋へと足を動かした。

「恵理ー、嘉穂ちゃん何かあったの？」

お母さんの心配そうな声が私の耳を通過した。私は無視して部屋に入った。そして私は疲れきった体をベッドに放り投げた。そしていつの間にか眠りにおちていた。

「恵理ー。恵理ー。」

嘉穂の声…？何だか右手が温かい。

「ぴぴぴ…」

私は目覚まし時計の音で起きた。そして私はノロノロと手を目覚まし時計の所までのばさ止めた。何だか変な夢を見た気がする。そして右手にはまだほのかに温かさがまだ残っている。嘉穂が私を呼んでいた…。

「嘉穂！ー！」

私はそう言葉を発し、携帯を手にとった。そして急いで嘉穂に電話

した。しかし、またもや結果は同じだった。

「おかけになった電話番号は―」

私は電話を切った。そして目から涙が落ちた。目が熱い。

「嘉穂…」

私はそう言って学校に行く支度を始めた。

学校に着くと嘉穂はいなかった。普段休まずにいる嘉穂の椅子にはいつも嘉穂が座っていた。なのに今日は他の女子が座っていた。私はトイレに駆け込んだ。そして一人、孤独に泣いていた。

その日、先生は嘉穂は風邪で休みだと言われた。私はその後の授業に集中することはむろん、できなかった。放課後、私は嘉穂の携帯に再び電話をした。

「おかけになった電話番号は―」

またあの声が聞こえてくるだけだった。

学校にも来ない…。私は嘉穂に何かあったのだと確信した。私はもう一つの手掛りのある場所を思い出した。そう、この学校。確か、昨日は嘉穂が道具を片付ける役だった。私は急いで、体育倉庫に向かった。だが、そこではいつも通り、いろいろな部活の人が部活の準備をしていただけで、何一つ、いつもと変わらなかった。

「鈴木ー！早く着替えないともう時間になるよー。」

私は仕方なしに私は着替えて部活に出ることにした。当然出る気にはならなかったがー。もちろん、授業と同様、集中できなく、普段滅多に外さないサーブすらあまり入らない有り様だった。

「鈴木ー、やる気あるのかー。」

という言葉が次々と先輩の口から流れてくる。どんなことを今の私にいつでも何も変わらない。

「鈴木ー！たるんでるぞ！今日は鈴木が片付けね。大会の前何だから少しは危機感をもちな。」

先輩の力強い言葉が私の耳に入る。言い訳をしたいところだったが嘉穂のことを話すわけにもいかず私はただ、

「はい。」

と言った。放課後、私は道具の片付けをた。放課後の体育はちょっとした寒気を感じる。その後、顧問の潟上先生に片付けが終わったことを報告し、私は帰ろうと廊下を歩いていった。何かおかしい。いつもならとくに下駄箱にもうつっているはずだ。別段、歩くスピードを変えてもいない。

何だか不気味だ。

私は、走ってみることにした。

だが20分たつても下駄箱につかない。私は疲れきって座りこんだ。どうなっているんだ…。いくら進んでも同じ廊下。進んでいるのか進んでいないのかわからない。私はまた進み始めた。が、結果は変わらない。いくら進んでも同じ景色。私は今どこにいるのだろうか…。私は無我夢中で走り始めた。が景色はずっと変わらない。クラスの教室をひとつ進んだと思ったらまた教室がある。それが永遠と続いている。私は本当にどこににいるのだろうか。今まで私がいた世界ではない他の世界、つまり異世界に迷いこんでしまったのか。いや、あり得ない。これは夢だ。私は瞼をおろし、そうだ覚めろ、覚めろ、覚めて！と私は、心の中で叫び目を開けたが、そこはさつきと変わらず学校の廊下の景色だった。私は嘉穂ももしかしたらこの世界に迷いこんだに違いないと思った。そうこの世界のどこかに嘉穂はいる！！その時あの不思議な温かさがまた右手に感じた。私はわけがわからないと思いつつ、私は嘉穂に電話をしようと思いついた。しかし、携帯は圏外になっていた。

学校で圏外になる場所…。その様な所、私の学校には存在しない。私は確信した、ここは私が今まで生きてきた世界ではない、異世界なのだ…。私はそれを確信した時、脱力感が私の心と体を支配しずるずると座りこみ、ただ何もせず、何処かを眺めていた。私はもといった世界が懐かしくなった。そしてまた目から涙が出た。

「ヒツヒツヒツ」と言う私が発する音だけがこの異世界の学校中に響いた。このまま私はずっと帰ることができないのか。いや、そん

なはずはない。この異世界に入ることが出来たのだ、出ることが出来ないはずがない。どこかに出口はあるはず！私はどこかに出口、または出口のヒントとなるものがないか周囲を見回した。そこで私の目についたのは教室のドアと窓だった。窓の所までいってみると外は真っ暗で何も見えなかった。ただ、永遠と闇が広がっているようにしか見えなかった。私は怖くなり、そこからノロノロと離れた。教室のドアを開けようとした。しかし、鍵がしまっているのかドアが開かない。私は仕方なしに窓の所まで歩みよった。そして窓の鍵の所に手を当てた。そして、私はゆっくりと、

「カチャン」

という音をたてて開けた。そしてソロソロと窓を開けた。私はゆっくりと手を窓の外に出してみた。窓から外の手が見えない…。私はとっさに手をだし窓からゆっくりと後退りした。すると、

「ドン」

という音をたてて後ろの壁をたててぶつかかった。手を触つてみたが何も変わったところはない。私はまたノロノロと窓へ歩みよった。

「ゴクリ…。」

私は唾を飲んだ。そしてまどの縁に手をおき、そして私は怖さのあまり、目を閉じ体全体を向こうに放り投げた。私はしばらく目を開けることができなかった。ただ私の心臓の鼓動がはっきりと伝わってくるばかりだった。

その時また右手に温かさを感じた。優しい温かさだ。私は目を開けることにした。

そして私はゆっくりと目を開けた…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3452c/>

これが私の旅

2011年1月16日08時55分発行